

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

新補語論

Wu, Niansheng / 吳, 念聖

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

99

(開始ページ / Start Page)

287

(終了ページ / End Page)

298

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004769>

新 補 語 論

呉 念 聖

本文の狙いは中国語の文法用語の調整・変更である。

そういう意味で論よりも案を題にしたほうがよいかも知れない。ただ、用語を改めるにはそれなりの理由が要るし、また文法についての全体構想にもかかわるので、やはり論じなければならないのである。

結論を先に簡単にいっておけば、本文では、現在、賓語（即ち目的語）とよばれた文成分を補語と改称することを提唱している。

このような意見は以前もあり（詳細は下文に）、決してわたしの新發明ではない。しかしながら、それは、一般論として現在の中国語文法には認められていない^①。そこで、あえて旧い曲を再奏するのもまた、新意があらうとわたしは思う。また、ここで提唱する補語は、現在、一般にいつている補語とは、まったく異なった内容を有するという理由もあって、本文の題目の中に補語に「新」を冠することにした。つまり、本文は新一補語論ではなく、新補語一論であるのだ。

以下、

- ① 中国語文法用語としての賓語と補語の登場及びその内容の変化、
- ② 英語やロシア語や日本語における賓語と補語の中味、
- ③ 改称の理由と新補語についての規定、
- ④ それに関連して現在の補語をどう取り扱うか、
- ⑤ 新補語論の応用

という順で述べていこう。

—

今日、いわゆる賓語（object）という文法用語は、受容範囲がきわめて広く、いわば「およそ動詞の後置成分は基本的に賓語に帰する」のである^②。

しかし、中国語の賓語の内容が最初からそうであったというわけではない。

始めて「賓語」を中国語文法に用いたのは黎錦熙氏である。時は今世紀の二十年代であった。ただ、その賓語は外動詞すなわち他動詞の受事対象と限定されていた⁽³⁾。

またその源をまとめれば、十九世紀末の『馬氏文通』の「止詞」または「賓次」までさかのぼることができよう。

したがって、ほんらい、止詞と起詞とのように、賓語は、主語の対称として、他動詞につき、その動作対象を表す体言だけをさす文成分であった。

もしも文を受け身の形に換えれば、主賓逆転（文構造上よりも文意上からとらえられよう。そもそも賓語は意味的色彩が濃い用語であるから。）可能であることがその用語の意味を裏付けているとも考えられる。例えば、

我吃饭了。 → 飯被我吃了。
 张老师教汉语。 → 汉语由张老师教。

ところで、今や賓語は、結果賓語、目的賓語、原因賓語、方式賓語、場所賓語、存現賓語（など十数種類）、そして判断賓語のようなものまで幅をきかせてきた。むろん今もなお、「是」につく体言を賓語として見ず、補語として見る意見も存在する。

一方では、黎氏の二十年代の同じ著書に「補足語」という用語も登場されている。その一つは「是」につく体言をさし、主語補足語と名付けられている。そしてもう一つは賓語補足語であり、現在の兼語文の理論でいえば、兼語文の兼語につく用語にあたる。「補足語」を通して、氏の英文法の補語（complement）概念を中国語に持ち込もうという意図がうかがえる。下文にもまた言及するが、ちょっと違うのは、いわゆる賓語補足語（object complement）は、英語の場合では形容詞か名詞によって担当される点である。

同氏は補足語を賓語とならべて述語の二大連帯成分としてとらえていた。

しかし五十年代に入って、黎氏は新著『漢語語法教材』の中で補足語を足語に改称した。

改称の理由について、本人は、現在「一般の文法書は大抵、述語の後につく副詞的附加成分を補語と称しているので、本書では補足語から補の字を取って足語にし、紛れを避けたい」と述べている⁽⁴⁾。

同時に黎氏は述語の後につく副詞的附加成分の別称として補語を用いることにした。「足語は意味を完成させるものであり、補語はさらに意味を補足する

ものである。」というのが本人の弁である。

その補語はすでに、現在の補語の内容、つまり「得」の仲介によって導き出された語句や、「赶走了贫困」のような文の中の「走」のような用語などを含めていた。角度を換えて見れば、その頃から、中国語の補語は英語の補語と異なった道を歩みはじめたといえよう。

しかし一方では、同氏は、外動詞以外の動詞につく体言を真の賓語と認めず、それを副詞性附加成分または「補語」と呼んでいる。ただ、それを副詞性賓語や准賓語と称する場合もある。さらに外動詞につく非受事体言も同様に取り扱われている⁽⁵⁾。

黎氏の著書中、文法用語の交錯・併用がよく見られる。その現象は、当時の中国語学界の現状をそのままに反映していたと思われる。

そして、同じ時期、賓語と補足語を合して補語または補足語と称する声もあがっていた⁽⁶⁾。

けっきょく、賓語と補語とは別々その体系をなしてきた。八十年代に入ってから、しだいに今日のような、動詞につく体言をほとんど網羅した大賓語体系と、用語を主体とし、さらに六、七の小類にきちんと整理された補語体系が形成されている。

二

英語の場合では、補語か賓語かはそれをとる述語が自動詞であるか他動詞であるかによって決まる。文の成分による文型は次の五種類に分かれる。

- ① 主語 + 述語
- ② 主語 + 述語 + 補語
- ③ 主語 + 述語 + 賓語
- ④ 主語 + 述語 + 間接賓語 + 直接賓語
- ⑤ 主語 + 述語 + 賓語 + 補語

自動詞なら①と②の文型を、他動詞なら③と④と⑤の文型をつくることができる。そして賓語になるのは必ず名詞であり、補語になるのは必ず名詞か形容詞である。それ以外は、みな修飾語（修飾句）となる。例えば、

The airplant got to airport at 7 o'clock.

の中で、「to airport」は場所を表す副詞的修飾語であり、「at 7 o'clock」は時間を表す副詞的修飾語である。賓語も補語も動詞に直接しており、前置詞の仲介を必要としない⁽⁷⁾。

今の英語の例文を中国語で表現すれば、

一架飞机七点到了机场。

となり、一般的に、「七点」は時間状況語つまり副詞的修飾語（語順は英語と違って動詞の前に置くが）として見なされるが、「机场」はその前に前置詞がなく、場所を表す賓語（本文では補語と呼びたい）としてとらえられている。中国語の場合、動詞とそれにつく体言との間に、前置詞は存在しない（「在」などにいくつかの前置詞句結果補語の存在を主張する意見もあるが）。

ロシア語の場合は、賓語という言い方はしない。動詞につく名詞（体言）は、前置詞があればそれも含めて、すべて補語と称される。

賓語をいわないのは、まず名詞形態変化があまりにも多いからだと思われる。名詞には変化しない主格（主語になる）以外、五格もある。

補語はさらに直接補語と間接補語に二分される。直接補語とは他動詞に直接につく対格名詞のみである。動詞につく他の格の名詞（とうぜん主格は除外）及び前置詞が介在する前置詞句はすべて間接補語である⁽⁸⁾。

動詞とその動詞につく名詞との関係から考えれば、

Я часто даю товарищу советы.

の中では、与格の「товарищу」を間接賓語として、対格の「советы」を直接賓語として見てもよからう。

しかし、自動詞の後に、前置詞を先導とした対格名詞もあれば、前置詞を先導とし或いはとしない与格名詞もあり、つまり名詞の格は必ずしも動詞の自他性と連動しない。しかも、名詞の格を決めるのは動詞だけでなく、前置詞でもある。ゆえに、他動詞に直接につく対格名詞を賓語ではなく、直接補語と呼んだのだ。

では、日本語の場合では、何が賓語（目的語）であり、何が補語であろう。今のロシア語の例文を日本語で表現すれば、

わたしはよく仲間たちに助言を与える。

となるが、文中の「助言を」は賓語として、「仲間たちに」は補語として認識される。また、上の英語の例を日本語で表現すれば、

飛行機が七時に空港に着いた。

となるが、「七時に」も「空港に」も補語としてとらえられよう。

つまり、日本語の中では、後置詞としての格助詞が賓語か補語か（主語も）を選別してくれる。以上の例にも示されるように、資格（目的格）助詞「を」（または「が」）がとれる動詞は必ず他動詞であり、また他動詞でも補語をとることがある。そして、格助詞の「に」、「で」、「へ」、「と」、「より」、「から」、「まで」がその前にある体言とあわせて補語となる。

ただ、日本語の場合では、補語という用語は普通は使わない。使う必要があまりないからである。もっとも、目的語という用語も他の言語と比較しないかぎり、使わなければならないという感はしない。目的語か補語かなんかよりも、どういう格助詞を使うか（動詞の自他性に関係する時もある）を考えればよい。

三言語を総合してみれば、賓語も補語も基本的には名詞（体言）によって構成されていることがわかる。また、賓語とは他動詞の施す対象にしぼられよう。

三

したがって、ロシア語の場合は、形態上、他動詞の施す対象を限定できないために賓語を使わないことにした。

それと対照的に、中国語は限定できないから賓語の範囲を最大限に拡大した。

確かに、今の中国語の文法理論では賓語を、主語に対するものではなく、述語に対するものだとして規定しているが、しかしそういうなら、なぜ依然として賓語（object）という用語にこだわるのか。

ことに、日本の中国語学界では、一般的にその賓語を目的語と称しているために、用語としての含みをもたせたることはなおさら難しい。例えば、目的賓語をどのように日本語で表現すべきか。目的目的語ともいうのか。じつに具合がわるい。

七十年代の末、呂叔湘氏は、「動詞の前にある名詞はすべて主語であり、動詞の後にある名詞はすべて賓語である」という論断が「すっきりはしている

が、一つ欠点がある、それはつまり主語と賓語を無意味な名称にしてしまったのである」と指摘し、そして動詞の後にある名詞をすべて「補語」と呼んでもさしつかえないようである。補語という言い方は賓語よりよく、主語に合わせなくてもすむだけでなく、しかも賓語と呼びにくいものも全部取り入れることができる」とも建言している⁽⁹⁾。

近年、日本でも、傳田章氏が、動作対象をいう目的語は補語の一種だというような趣旨を表したことがある⁽¹⁰⁾。

上文の中で、わたしは、黎氏の著書には賓語や補語の新生期の混乱が投影されたことを述べていたが、しかし視点を変えれば、そこがこそ賓語や補語の出発点ではないのか。もう一度出発点にもどってよく学習してみたら、啓発されたところはじつに多であり大であった⁽¹¹⁾。

賓語を補語に改称する問題をめぐり、次のように私見をまとめてみた、

- ① 述語を主語の対称として認識し、その主語は体言であるべく、述語は用言であるべし。
- ② 述語（用言）に付随する体言をすべて補語と称する。
- ③ 述語に対する補語は、構造上と意味上との両面において述語を補うことになる。
- ④ 補語は、その必要性から必補補語と非必補補語に分けることができる。必補補語は不完全動詞述語により、非必補補語は完全動詞述語による。
- ⑤ 現在の数量補語も補語の一形式として認める。
- ⑥ 賓語という用語を使ってよろしい。が、それを他動詞の施す対象に限定し、補語の一形式としてとらえるべし。

四

それでは、現在、一般に知っている補語、数量補語を除いて、をどのように位置づけ、どのように名付ければよろしいだろうか。

詳細は別稿にゆだねるが、結論をだけいうとそのすべて（数量補語を除いて）を述語として見なす。つまり複数の述語を認めることである。

例えば、前置詞も助動詞も文構造を分析するにあたって述語の一形式としてとらえる。品詞分類の立場からは、前置詞や助動詞のような分類はしない。

そしてもっとも重要なのは、複数の述語の基点が最終述語にあるという認識

である。そこには、文自身の表現時間経過があり、多述語における逆線形原理が働いているように思われる。最終述語が文表現の時間的な終着点であり、そこから見れば、その前にある述語はみな先導述語または先導動詞となる⁽¹²⁾。

例えば、「吃饱」について、今の文法では「饱」は「吃」の結果補語で、つまり「述語→結果補語」というふうに描いているが、わたしは「吃」が「饱」の先導述語で「饱」こそ基点であり、「先導述語←最終述語」というふうに描きたい。

文構造は三層で立てられる。

第一層：	主語	先導述語		最終述語	
第二層：			補語		補語
第三層：	連体	連用	連体	連用	連体
	修飾語	修飾語	修飾語	修飾語	修飾語

五

1. 受事か結果か

弟弟吃面包。

妹妹给她一支钢笔。

张老师教汉语。

张老师教我们。

张老师教我们汉语。

以上の例文の中で述語動詞につく体言は、いわゆる受事賓語であって「最も賓語らしい賓語」とも呼ばれている⁽¹³⁾。新補語の枠組みの中で、補語と呼ぶことになるが、賓語と呼んでもよい。

むろん、今の賓語と同じように、補語はその前の述語とは受事、結果、目的、手段などのいろいろな関係で結ばれている。次の例を見よう。

挖土 土を〈受事〉掘る

挖洞 穴を〈結果か目的〉掘る

炒肉 肉を〈受事〉炒める
 煮飯 ご飯を〈結果か目的〉炊く

浇水 水を〈受事?〉かける
 浇花 花に〈対象?〉(水を)かける
 用水浇花 水を〈方式?〉もって花に〈対象?〉かける

洒水 水を〈受事〉まく
 洒水浇花 水を〈受事〉まいて(その水を)花に〈対象?〉かける

意味も語順もはっきりしているが、しかし、動詞とそれがとる名詞とはどういう関係なのかと問われると躊躇する。

思うに、学校文法の範疇ではそこまで追究するのはたして必要であろうか。賓語をいうから、ついに主語またはそれをとった動詞にあわせてどんな賓語であろうかと考えてしまうのではなからうか。補語というなら、単純にその位置による名称だけだと思えばすむとわたしが推測する。

鄭懷徳氏の統計によれば、2133種の意味を代表する動詞(1341種の常用動詞から一動詞多義の要素を計算に入れた数)の中、受事賓語を取れるものは1072個で全体の50.7%を占め、ほかに、対象賓語は317で15%、結果賓語は293で13.9%、道具賓語は127で6%、方式賓語は54で2.6%、目的賓語は54で2.6%、原因賓語は17で0.8%、また雑類賓語は125で5.9%である⁽¹⁴⁾。

当該統計は使用頻度を表していない(もともとそのための統計ではない)が、動詞とそれにつく体言との多様関係を十分に反映しているはずである。そのような体言を一括して補語と称するのが本文の主張である。

2. 場所を表す補語

その多くは趨向動詞または動詞「在」につき、動作が行われる起点か終点、または範囲を表す。

趨向動詞は自動詞だから、多くの場合ではその補語は非必補補語である。

他去学校。 → 他去。
 去食堂吃饭。 → 她去吃饭。

爸爸想去中国。 → 爸爸想去。

ただ、一部の趨向動詞が移動動詞を先導動詞とした時、場所を表す補語が不可欠な場合もある。

老师走进教室了。 → 老师走进了。〈文は成立しない〉⁽¹³⁾

先導動詞の概念を用いるならば、動詞の「在」か前置詞の「在」かそれとも補語の「在」かを分けなくてもすむ。

学生在教师里。

学生在教室里学习。

书放在教室里。

同時に、今の前置詞賓語という用語も要らなくなる。

また、「到」を動詞だけとしてとらえるかそれともその前置詞の存在を認めるかという問題も解決される。

到了学校。

走到了学校。

到学校去了。

の中では、みな動詞の「到」である。ただ文中の位置の差によって、先導動詞として働くものもある。

3. 主語の性状を表す補語

「是」のような動詞は、同動詞とも言われるように、主語の性状を表す補語を導き出すもので自分自身はあまり意味をもっていない。しいていえば、機能とあわせて一種の判断を下す環境を作り出しているのである。「是」は不完全動詞でありその後にある補語はむろん必補補語である。

我是中国人。

那叫文字处理机。

他像爸爸。

しかし、

他是很胖。 彼は（確かに）太っているのです。

他是来了。 彼は（確かに）来ているのです。

の場合、「是」は先導動詞として認識される。

また、否定文を除いて、肯定の場合では「是」を省略することもある。（その文型を名詞述語文と呼ぶ意見もある。）

今天星期一。

この文は、わたしは「是」を省略した動詞述語文だと見ている。それは、ここでは「是」のもつ（弱い）判断意味や判断機能がなくてもかまわないと考えられる。否定表現なら、はっきりした判断が必要なので省略しない。また、上の例文の、

他是很胖。 → 他很胖。

にしても文は成立するし、文意もそう変わらない。前者は「是」を先導とした「胖」がやや強調された程度である。逆にいえば、後者は判断を下すのではなく性状を描くだけだから、「是」を省略したという見方も立とう。

4. 数量を表す補語

他看了电影。

他看了三次。

他看了三次电影。

数量を表す補語と他の補語との併用がある。

奶奶睡了。

奶奶睡了午觉。

奶奶睡了一个小时。
 奶奶睡了一个小时午觉。
 奶奶睡了一个小时的午觉。

最後の二つの表現について、今のところは、何通りの分析方法もある。一つは前者を〈時量補語 / 賓語〉として、後者を〈連体修飾語 + 賓語〉として見る。

もう一つは「一个小时午觉」を「一个小时的午觉」の省略だという。ゆえに、時量補語そのものを認めない。

または折衷して「一个小时」を時量補語ではなく准賓語と呼ぶ。

しかし、どの方法も、文意味上も文構造もきわめて近い二文をむしろその差を拡大した方向へ説明している嫌いがある。

新補語の観点でみれば両方とも補語となるがゆえ、その実存と分析法との差がずっと縮んだ感がする。

〈注〉

- (1) ここでいう中国語文法はおもに学校文法を視野に入れたものである。例えば、《暂拟汉语教学语法系统》(人民教育出版社中学汉语编辑室 1956年)、《中学教学语法系统提要》(人民教育出版社中学语文室 1984年)及び一般の教科書により述べられている文法である。
- (2) 注(1)に記された《暂拟系统》の賓語観について林玉山氏が述べた言葉である。原文は：凡动词的后置成分一般归为宾语，主要采取丁声树等《现代汉语语法讲话》的讲法。(《汉语语法学史》202p 湖南教育出版社 1983年)
- (3) 《新著国语法》15, 33p 商务印书馆1954年版による。初版は1924年。
- (4) 黎锦熙・刘世儒《汉语语法教材》商务印书馆 1958年。
 原文は：‘足语’就是所谓‘补足语’，现在改用旧名，双字相称；并且一般语法书多把“后附的副附”叫“补语”，本书的‘足语’就去掉了“补”字，免得相混。‘足语’是‘足成其义’；‘补语’是另有补充；名实相符，两无妨碍。(202p)
- (5) 黎氏の補語論について、拙稿『论黎锦熙刘世儒《汉语语法教材》的补语观——以传田章的汉语课本《中国语基础文法》作对照——』(『語研フォーラム』4 早稲田大学語学教育研究所 1996年3月)をご参照。
- (6) 陈望道〈对于主语宾语的两点意见〉《汉语的主语宾语问题》所収 200p 中华书局 1956年。
 陈仲选〈对于曹伯韩，高名凯两位先生论主语宾语的意见〉同上著書所収 217-218p。

- (7) 英文法について、平賀正子・藤井洋子の放送大学教材『英語Ⅰ('96)』（放送大学教育振興会 1996年）を参考にさせていただいた。
- (8) ロシア語文法について、韦光华・韦威华《新编初级俄语语法》（商务印书馆 1962年）と和久利誓一『入門ロシア語文法（改訂版）』（白水社 1970年）を参考にさせていただいた。
- (9) この呂氏の論点は本文の原点の一つである。ゆえに、少々長く引用させていただく、

凡是动词之前的名词都是主语，凡是动词后面的名词都是宾语。干脆倒是干脆，只是有一个缺点：‘主语’和‘宾语’成了两个毫无意义的名称。（《汉语语法分析问题》71p 商务印书馆 1979年）

既然宾语不跟主语相对，有没有必要还管它叫宾语？是不是换个名字好些？不错，‘宾语’这个名字已经叫了多年，叫熟了，叫惯了，最好不改。可是从另一方面看，只要你保留‘宾语’这个名称，人们就要拿它跟‘主语’配对，就要找一个标准来区别它们，或是授事关系，或是位置先后；就不想到它们各有自己的对立面（一个是谓语，一个是动词），各有把自己区别于它的对立面的标准。因为‘宾’和‘主’相对，正如‘阴’和‘阳’相对，‘负’和‘正’相对，已经深入人心，牢不可破，不管你有多少编‘主语和宾语不是对立的東西’也没用。而且，由于历史的原因，要让‘宾语’包括受事（以及比较接近受事）以外的事物也有困难；例如对于‘施事宾语’就有人摇头。那么，不叫‘宾语’叫什么？如果没有更好的名称，似乎不妨叫做‘补语’。补语这个名称比宾语好，不但是不跟主语配对，而且可以包括某些不便叫宾语的成分。（同書 74p）

同書には日本語訳・大東文化大学外国語学部中国語学科研究室『中国語語法分析问题』（光生館 1983年）がある。ただ本文の引用はその訳を取っておらず、筆者によるものである。

一言をつけ加えさせていただくが、現在の補語をどう見るかについては、筆者は呂氏とはちょっと見方が違う。

- (10) 『現代中国語基礎』11p 内山書店 1988年。
- (11) 注（5）に記された拙文をご参照。
- (12) 「加以」「给予」などを先導動詞と呼び、それを動詞の一類に帰する見解がある（范晓等《汉语动词概述》125p 上海教育出版社 1987年）が、私のいう先導動詞とはまったく次元の違うものである。
- (13) 原文は：最常见的宾语是表示行为的对象。这类是最地道的宾语。（孙玄常《宾语和补语》9p 上海教育出版社 1984年）。
- (14) 郑怀德〈带结式动词和不带结式动词〉（中国社会科学院语言研究所现代汉语研究室编《句型和动词》所収 283-301p 语文出版社 1987年）。
- (15) ただ、「进」の後ろに「来」か「去」がつくならば場所を表す補語がなくても文を完結できる。

老师走进来了。